

みやけの風

第 214 号

平成17年(2005年)3月12日(土)発行
 発行：三宅島災害・東京ボランティア支援センター
 発行責任者：上原 泰男
 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ 10階
 東京ボランティア・市民活動センター 気付
 TEL：03-3260-7573 FAX：03-5229-1646
 E-mail：tokyocenter@cmpo.org

島に久しぶりに帰りました。夜、車で走っていると、カエルがたくさん。明日は雨だなーと思っていると、主人が「このカエル達も、4年半のりきってきたんだな」とポツリ。なんだか、愛しくなりました。

みんなの声

詩『絆』

はじけるような 笑い声 聞こえます
 三宅の空に 三宅の海に みやけの風に

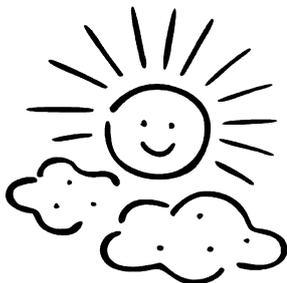
ぬくもりが 雲に乗って 輝いています
 ふるさとが 明るく 生きています

きらめく星が 希望の道を 照らします
 これから いまから 始まります

自然が 泣いて 怒っています
 あるがままに 共有させてください

ふるさとと 共生する 喜び溢れます
 人と自然のつながり 永遠回帰です

はじけるような 笑い声 聞こえます
 三宅の緑に 三宅の島に 三宅の魚に
 (神着 葛西 梢)



お世話になりました皆様へ

噴火災害により三宅島島民は平成12年9月より島を離れ、広い東京で離れ離れの避難生活をおくることになりました。そして4年半もの間、島民たちはそれぞれの避難先でたくさんの人たちに様々な支援を受けて生活してまいりました。

足立区に避難した頃、私たち初めて暮らす街の様子に戸惑いながらも地元の皆様に暖かいお心遣いをいただいて、とても励まされたことが昨日のことのようです。その時は、皆様とのお付き合いがこんなにも長くなるとは思いませんでした。長い間いただき続けたご支援にとっても感謝いたしております。

本年2月避難指示が解除され、いよいよ三宅島島民の帰島が始まりました。三宅島では帰島期間を7月までの半年間としています。帰島の条件は、『火山ガスとの共生』をいう厳しいものですし、4年半もの避難生活の間にいろんな事情を抱えるようになった家族もあります。子供たちは大きくなりました。身体を悪くしたお年寄りもいます。帰れない人たちも決して少なくありません。

今、私たちは避難中にお世話になりました皆様への感謝の思いで一杯ですが、帰れない人には引き続き、共に生活する街の人間としてお付き合いいただければ幸いです。

三宅島では小鳥たちの春のさえずりで眼を覚ます季節となりました。故郷三宅島の再出発は決して楽なことばかりではないと思いますが、島の仲間とともに島の再興に力を尽くしてまいりますので、今後ともどうかお見守りくださいますようお願い申し上げます。

平成17年3月吉日

足立三宅会 会長 池田 金好
 足立区内に避難する島民一同

三宅島帰島支援ボランティア活動 事前研修会に参加して

2月下旬、飯田橋で開かれた三宅島ボランティア事前研修会に参加した。三宅島ボランティア希望者は参加が必須となっているもので、いまだ火山ガスの噴出し続ける島内でより安全で有意義な活動を行うべく、島の現状とその安全性や健康面でのリスク、そして事業内容などについて専門スタッフからの研修が行われる。午後7時の開始時刻を迎えるころには、すでに会場は100名を超える人でいっぱいだった。

受付ではカラーの図版や写真が多く入った資料をたくさん渡された。話はこの資料にそって進められていった。

最初にこれまでの三宅島島民への支援活動を一通り振り返り、続いて慶応大・大前先生による火山ガスについての話が始まった。火山ガス、現在の状況、リスク、健康への影響、そして活動を行うにあたってのルールなど、ややもすると少し専門的で特殊な環境の話を我々の日常生活に照らし合わせつつ丁寧に話していく。中でも火山ガスの成分の中で問題のある「二酸化硫黄」についての四日市ぜんそく公害や、観光地である阿蘇山噴火口での測定値と並べて進められた話は、ふだん二酸化硫黄などとは縁のない我々にとっては理解しやすく興味深いものだった。

話の最後に質疑応答があった。私も多少の疑問点がいくつかあったが、それに対する回答のほとんどはすでに『質問と回答集』という資料の中に記されていた。これは三宅島島民に向けてこれまで数十回と重ねられてきたこうした説明会の中からまとめられたものだからで、例えば私の知りたかったアトピーで皮膚が弱い場合の影響についてなどまで載っている。質問は意外に少なかったが、これは参加者に疑問点がなかったのではなくてこうした資料だけで十分だったからだろう。このような気の利いたある意味貴重な資料まで周到に準備されているところからも、ボランティア支援センターの努力が垣間見えた。

参加者一同がのめり込むようにして聴いていた先生の話が終わった。短い休憩の間に、ガスに対しての高感受性などを判断するための健康診断書アンケートを書き込む。

そして休む間もなく実際の島内での活動についての説明が始まる。通常の研修会であればここから始まるころだろう。引越いや生活環境整備、ふれあい交流などの活動内容をはじめ、渡航手続きから島内の住環境まで具体的なボランティアの動き方が説明された。一通りの話が終わったあと、我々より一足早い2月上旬頃に活動を行ってきたボランティアの方からの話があった。まだ向こうでの体制も十分整っていない中で試行錯誤されてこられたということで、その経験と教訓を次に行く人たちに伝えたいということだった。

その方自身はこれまでも新潟での水害や震災支援として現地で活動してこられた災害ボランティア経験者の方だったが、そうした場を踏んでいる人にとっても毎回現場ごとに事情は異なり、今回の場合でも派遣先での柔軟な判断が要求されたという。熱く語られたことばの端々から次の人が同じ苦勞をしないようにという気持ちが伝わり、またそれだけ向こうで悩みながらやってきたのだろうということも想像できた。

厚く堆積した降灰の除灰は相当大変だが雨でしめると剥がしやすくなる、泥の中での作業には長靴が便利といった知恵袋的な情報も参考になったが、なによりもそうした話の全体から漂う現地の空気感というものがとてもよく伝わってきた。島の時間はゆったりと流れ、そんな中では作業をするばかりではなく島民の方々と話したりするコミュニケーションもとても重要だという。

この研修会に参加している我々もそうだが、特に災害ボランティアに参加する人たちはそれぞれが熱い想いを抱いてやってくる。それは時に冷静さを欠き視野を狭めてしまい、自分だけでなく周りの活動にも混乱を招いたりもする。そんな高ぶる熱いココロを胸の奥に包み込みながらも、現地では柔軟にゆったりと冷静に愉しく活動したい。この先輩ボランティアの経験を引き継ぎ、また次へと継いでいけたらと思う。

濃密な研修会だった。

(えっ!? まだやってるの神戸 金原雅彦)